

平成 26 年 2 月 5 日

南 の 風 5 6

南部ミニバスケットボール連盟

会 長 藤原 敬一

オールジャパンの女子の決勝についても書きます。(時間が経ってしまいましたが)
結果は下記の通りです。

	1P	2P	3P	4P	計
JX	18	21	13	17	69
トヨタ	13	15	6	27	61

JXが去年のリベンジを果たし、トヨタの2連覇を阻みました。このゲームは勝敗云々よりもトヨタの攻守に、我々指導者が参考になるものがたくさんありました。

まず、トヨタのオフェンスから書きます。トヨタは立ち上がり、生命線である3ポイントシュートが決まらず、7本連続で落としてしまいます。しかし、3ポイントに行くプロセスには工夫が見られました。ピック&ロールやフレイヤースクリーンをふんだんに使ってノーマークをつくろうと努力していました。また、スクリーン後のポストアップも試み、中でもプレイしようという意思が感じられました。

バスケットボールは、やはり普遍的に中と外を攻めることが必須です。身長で劣るトヨタは、JXの高さを如何に掻い潜って得点するかが命題です。

この辺はミニバスの低身長チームには参考になります。ミニバスでいえば、多くのチームが用いている、ドリブルパンチングからのショットやドライブ&キックといったプレイです。如何に中を突いて攻め、外と合わすかということです。ポストプレイだけが中のプレイではありません。

話を戻します。1Pで10対6でJXがリードしたところで、トヨタは選手交代をし、ディフェンス(2-2-1のゾーンプレス)を変化させました。するとリズムがよくなり、このゲーム初めての3ポイントシュートを決めました。

2Pでもトヨタはスクリーンを起点にし、中と外の合わせの攻めを展開します。特に中でのプレイでは、ミスマッチをねらったスクリーン後のポストプレイが有効でした。また、バックスクリーンからフレイヤークットし、3ポイントに繋げる動きにも工夫が見られました。さらに、JXが3ポイントシュートをチェックに出てくると、すかさずドライブインで中を突いて攻めも参考になりました。

トヨタは残り7分で、一時逆転します。ゾーンプレスから相手のミスを誘い矢野選手(12番)がショットを決めました。**トヨタのオフェンスに強い意思を感じました。**すぐに再逆転されるのですが、JXの高さや個人能力に対して、システムで対抗しようとするチームの考えが伝わってきました。

この後、JXの3ポイントが次々に決まり、リードを広げられてしまいます。結局前半を終わった時点で39対28でJXがリードしました。

オフェンスは本当に難しいものです。最後はシュートの決定率です。トヨタのオフェンスシステムはよくできています。ノーマークのつくり方にも工夫があります。勝負に「・・・していたら、・・・していれば」は、いけないのですが、トヨタのショットの決定率が上がっていれば、点数は逆になっていたはず。シュートの精度を上げることはやはり、永遠のテーマなのです。 続きは次号で。